

## COPD(慢性閉塞性肺疾患)での処方薬剤

■ COPD(慢性閉塞性肺疾患)は世界の死亡原因第4位にランクされる病気であるにもかかわらず、その実態はあまり知られていません。今回はそのCOPDについてお伝えします。

■ COPDとはどのような病気でしょうか。COPDは慢性気管支炎、肺気腫など長期にわたり気道が閉塞状態になる病気の総称です。症状は、風邪でもないのに咳や痰が毎日のように続いたり、階段の上り下りなど体を動かした時に息切れを感じる等が挙げられます。COPDはゆっくりと肺機能の低下が進み、全身に広がっていきます。初期の段階では咳や痰の症状なので、多くの方は異常に気がつきません。異常を自覚して受診する頃には重症になっているケースがほとんどです。

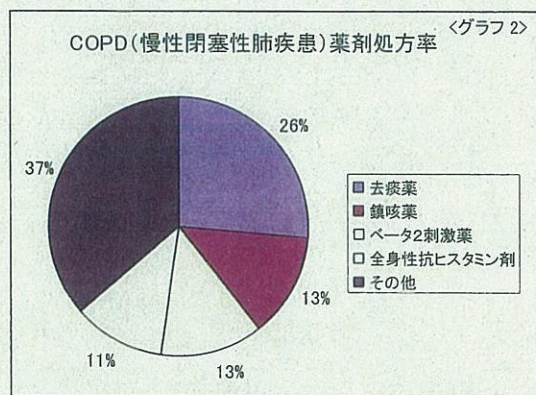
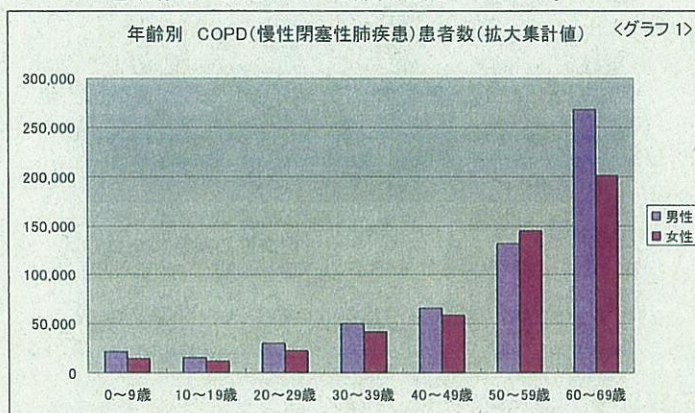
COPDの主な発症要因は喫煙によるものですが、健康な人でも年齢と共に肺機能は少しずつ低下してくるので「COPDを発症しない」とはいえません。

慢性気管支炎:気管や気管支が慢性的に炎症を起こし、粘性のある痰が押し出されにくくなり、咳や痰が続きます。

また、気道の壁が厚くなるために気道が狭くなり、空気の通りが悪くなります。

肺気腫:肺の中に無数にある肺胞(気管支の最終枝に葡萄の房状についている袋)は酸素と二酸化炭素の交換をする役割をしています。その肺胞が炎症によって潰れてくっつきあい、肺に空気がたまって膨れ上がった状態になると、空気の出し入れがしにくくなります。新しい空気を吸うことができないので、息切れを起こしやすくなります。

■ COPDの患者数と処方されている薬剤を見てみました。



※グラフ1・2:データ出典:JMDCデータより(対象期間:2004年9月~2005年8月)

年齢別に見ると男女共30~40歳あたりから徐々に患者が増えています(グラフ1参照)。COPDは一般的に40歳以降に発症するといわれており、年齢が上がるにつれて患者数が増加していく疾患であることが分かります。

男女別で見ると50代で男女の患者数が逆転しています。多くの研究で、COPDの有病率は女性よりも男性で高く示されていますが、「男女差がある」という確証は得られていません。同じくらいの喫煙歴の場合、女性のCOPD発症リスクは男性と同等かそれ以上であるとも考えられているようです。

薬剤の処方率では、咽頭または気管にたまっている痰を取除く作用のある「去痰薬」が26%、咳の発作を抑える薬「鎮咳薬」13%や、発作で狭くなった気管支を拡張し呼吸を楽にする「ベータ2刺激薬」13%などがあります。(グラフ2参照)

■ COPDの予防には禁煙が一番効果的です。喫煙はCOPDと関係の深い病気といわれており、COPDを発症する人のほとんどは喫煙が習慣になっている人です。喫煙は非喫煙者にも大きく影響し、受動喫煙によってCOPDなどの呼吸疾患にかかりやすく、呼吸機能が低下します。

4月から禁煙指導が保険適用となりました。「ブリンクマン指数(=1日の喫煙本数×喫煙年数)」という喫煙指数を表すものがありますが、この指数が200以上の人はニコチン依存症と診断されます。禁煙治療や肺機能検査を受けて早期に発見し、正しい治療を受けて悪化を防ぐことが肝心です。